

農作物の高温・乾燥害対策について

環境農業推進課

水 稲

早期水稻

ア 収穫前の落水は、「コシヒカリ」は出穂後20日頃を目安として、収穫作業に支障のない時期までかけ流しを行い、その後は枯れ熟れとならないよう、気温の低い時間帯に水を走らせる。

普通期水稻

ア 中干し後のかん水は、根に急激な変化を与えないように、かん水と排水を2～3度繰り返す。

イ 幼穂形成期～穂ばらみ期は、最も水分を必要とする時期であるが、高温により地温が上昇し土壌の還元が進み、根腐れが激しくなるでも時期である。そのため、浅水にして、時々根に酸素を供給できるようなかん水方法を行う。

ウ 開花期を過ぎれば、浅水及び間断かん水とする。

露地野菜・花き

ア 敷き草を十分行き、土壌水分を保ち、地温の上昇を防ぐ。また、通路にも敷く。

イ かん水や葉面散布は、日中を避け朝夕の地温の低い時間帯に行う。河川水をかん水に利用する場合は、ショウガでは根茎腐敗病、シシトウ、ピーマンでは疫病の発生の危険性があるので、塩素系殺菌剤等で消毒してから用いる。また、畝間かん水は湛水ではなく掛け流しで行う。草勢が弱っている場合は薄い液肥を加える。

ウ 草勢が弱っている果菜類での収穫は、やや若採りとし、変形果などの不要なものは早めに摘果して、着果負担を軽減する。

エ 乾燥が続くとアブラムシやダニ類、ハスモンヨトウ、ミナミキイロアザミウマ、アワノメイガ、オオタバコガなど害虫の発生が多くなるので、防除に努める。

オ 薬剤散布は、日中の高温時には薬害の恐れがあるので、夕方の温度が下がった時間に行う。なお、薬剤散布に先立ってかん水をしておくと、薬害の発生を少なくすることができる。

果 樹

ア 急激な水分変化や高温で発生する、ユズの凹型コハン症、ブントンの果頂部コハン様症、新高ナシのミツ入り症等の生理障害に注意する。

イ 敷草などを十分行き、土壌表面からの蒸散防止と保水に努める。

ウ かん水は日中を避け、気温の下がった夕方に行う。かん水量は1回当たり20mm程度、5日間隔を目安とする。少ない水を効果的に使用するには、点滴かん水を行うと良い。

エ 乾燥により害虫の多発が見られるので、適切な薬剤を用いて防除を行う。ダニなどは水の散布だけでも効果が期待できる。